アイヌの工芸

アイヌの工芸は、自然と深く結びついていた世界観を反映しています。それぞれの縫い目、文様、模様のすべてが、自然界とそこに宿ると信じられている「カムイ」（神々）への畏敬の念を表現しています。

アイヌの伝統では、織物や裁縫は女性の仕事であり、一方で男性は道具を彫り用具を作成していました。衣服の中には交易で入手した木綿で作られたものもありましたが、習慣的にはオヒョウやカラムシなどの樹皮の内側の繊維から糸を紡いで織った「アットゥシ」と呼ばれる丈夫な布を作っていました。衣服には複雑な刺繍や装飾が施されることが多く、女性たちは衣服を縫い、装飾を施す際に、着用者を守るためにカムイへ祈りを捧げていました。模様は自然からインスピレーションを得て、家族ごとに異なっていました。母から娘へと受け継がれ、花嫁が新しい家族を象徴する文様を取り入れることで、模様は結婚を通じて進化していきました。

アイヌの男性は、木彫りを練習し、刀の鞘、矢、煙草入れなどの道具や、「イナウ」（祈りの木幣）や「イクパスイ」（捧酒箸）などの儀式用具を作成していました。工芸の技術は、村のリーダーの要件の一つでした。また、美しい道具を使用することが、狩りの成功につながると信じられていました。

19 世紀後半に、狩猟や漁労に対する制限により、伝統的なアイヌの生活様式を続けることが困難になりました。人々は道具、容器、箸など日用品を、収入を得る方法として制作していました。第二次世界大戦後すぐに発展した観光産業の高い需要の恩恵を受け、旭川のアイヌは徐々に木製の人形や熊の彫刻制作へと重点を移していきました。